



新教育プログラム「〈地球村〉プログラム」にチャレンジ

「地球村」、恐らく初耳の方が多いと思います。これは、「真のグローバル教育とは何か」ということを長年研究し、その成果を実践プログラムとして完成した渥美育子氏による教育プログラムです。もともとは企業人向けの研修プログラムでしたが、中・高生用にも開発し、既に何校かで実践されています。渥美氏については下記に詳しく紹介致しましたのでご覧ください。

さて、「〈地球村〉プログラム」とはいったいどのようなものなのか。本校での実施に向けて、中田教頭、そして社会科の新貝先生に体験してきてもらいました。まず新貝先生の「〈地球村〉プログラム」に関する紹介をお読み下さい。

「〈地球村〉プログラム」 新貝 哲平

〈地球村への10のステップ〉TMは、(社)グローバル教育研究所の理事長である渥美育子氏が、「ヤング時代からの自国の価値観を核として、世界的視野に立って貢献する人材を育てる」目的で制作した総合教育の教材です。その内容は、「グローバル時代の重要性に気づきはじめたヤングたちが、国連で地球の危機を訴えた12歳の少女のスピーチに感動、グローバルコースターに乗って地球をまるごと眺める体験をする。そして地球にかえり、人間がこれまで体験してきた歴史をみずからくりながら、この世界をどう変革していったらよいかに目覚め…」といった、何ともメルヘンチックなストーリー仕立てになっていますが、教材は全て事実・史実に基づいて構成され、ひらめき・想像力を大切に、グローバルな視点を身につけるといふものです。以下にそのプログラムの章題目を記します(全8章)。

1. イントロ：グローバル時代を生きる。
2. 地球の大きさを測った男
3. 文化が違えばルールも違う
4. “絹の道”、じゃんけんの旅
5. “悲劇”と“偉大な仕事”の分かれ道
6. スピーチの練習
7. 地球村の憲法を創ろう
8. ヤングサミットの開催

この概要を見ても、プログラムの全体像はなかなか見えにくいと思いますが・・・

様々な空間軸・時間軸から世界を俯瞰して多くの国の文化・歴史にふれ、最終的には自らの考えをアウトプットするという内容なのではないかと考えられます。

では、ここでいう「グローバルな視点」とはどのような視点なのでしょう。渥美氏によると、『国際的な視点』が国を単位として国と国との関わり(International)に焦点を当てているのに対して、『グローバルな視点』とは天球としての地球(Globe)を丸ごと捉える視点である。」と述べられています。また、このような視点を身につけるべき理由として同氏は「21世紀に入



〈文化の世界地図〉

り、世界中の国や企業が原則的に自由競争を行っている。世界を俯瞰して多様な価値観(ダイバーシティ)を理解することは、これから社会で活躍していく上で欠かせない要素である。」と述べています。

さて、海城の生徒諸君は中学校3年間の社会I・II・IIIを通して、自発的に身近な(主に国内の地域や特定の産業を対象とした)社会問題を探求する姿勢・手法を身につけていると思います。そのような「ローカルな視点」で社会を捉えることには長けている海城生ですが、世界の全体像を捉える、いわゆる「グローバルな視点」をもっている生徒は少ないのではないかと感じます。しかし、裏を返せば、グローバルな視点をもつことができれば、海城生は「2つの空間軸」で社会を捉えることが可能になるともいえます。リベラルアーツの重要性が高まっていく中で、このような視点を手に入れることはまさしく「鬼に金棒」ではないでしょうか。

「地球村」実施に寄せて

渥美 育子

グローバル化を語る人は大勢いるが、グローバルに生きる人は少ない。グローバルに生きるとは、「世界の壁をすべて取っ払って全体をみることによって、眼からうろこがおち、今の世界を変えたい衝動をおさえきれず、行動に移す生き方」である。グローバリゼーションは、それが変革の方程式になる時、最大の意味をもつ。

私は、大企業のグローバル人材育成を、文字通り真剣勝負で行っている。そこで感じることは、「世界市場で総合能力を発揮できる日本人を、1年に2～3日しかないセミナーでどうしたら育成できるだろうか?」「戦略をたて、全体を最適化していく地球規模のプロセスを、業界・業種毎と参加者の階層・担当ビジネス毎に直面する問題との二重のカスタム化をしながら、どう胃の腑に落ちるように実感してもらえるか?」ということである。

制限の多い環境だが、もし企業に入ってくる若者たちがすでに身につけていたら、もっとスピーディに理解が進むだろうと思われる能力がある。それは、グローバルに発想する力である。

東京都下の私立校のホールを借り、7校から25人中3・高1の生徒を集めて、〈地球村への10のステップ〉という私が制作したグローバル教育プログラムの公開授業を行った。

イントロで、生徒たちはグローバル時代に生きる意味を学び、1992年に開催された、時代の幕開けの時に国連主導のリオ環境サミットで、当時12歳のカナダの少女が、「地球の直し方がわからないなら、壊さないでください」と世界の大人たちに訴えたスピーチを聞く。そして自分たちがデザインした超高速の乗り物に乗って、考えられないほど広大でまっ暗闇の宇宙へ飛び立つという疑似体験ワークからスタートする。振り返ると満地球が。生徒たちは何かとてつもなく大きな力を感じ、小さな地球に生命をもらった不思議さうたれて宇宙飛行士のように地球に戻ってくる。

そこから10の宇宙駅を通過して、地球規模の世界空間と何千年もの時間軸に沿って飛行記録をつけながら、地球村に向かう旅が始まる。まずは、古代ギリシャへ。最初に出会うのはコンピューターも飛行機もない時代に自然と日常生活をしっかりと観察し、地球の大きさを初めて正確に測ったエラトステネスだ。彼はエジプトのアレクサンドリアにあった世界最大の図書館と隣接する学術研究所ムセイオンの長であった。ムセイオンでは天文学、物理学、医学など各分野の専門家が知識を共有して世界の原理原則を総合的に極めようとしていたという。生徒たちは、夢を決してあきらめず、ついに地球の大きさを測ったエラトステネスに感動する。私は「世界全体を知りたい」という彼のおさえきれない情熱に共鳴し、グローバルビジネスも垣根や壁を壊して世界全体をよく知ることで始めて、オリジナルな発想や新しい世界への貢献の仕方が

わかってくるのだ、という思いを強くする。

<地球村>は人間がこれまでやってきたことを21のハイライトで体験していくプログラムである。第二次世界大戦全体を把握し、アンネの日記でそれを内から描いた少女の短い人生を自分も生きたように感じたあとで、生徒たちは戦後70年間に起きた1000以上の戦争とすばらしい業績を世界地図上に記録するパネルを作り比較。人間は残酷にもなれるし、すごい地球村をつくっていくこともできると実感する。そのあと、世界の異なる時代のリーダーたちが求心力を求めてルールづくりをおこなった現場に飛び、ヒントを得て、残酷な衝動に歯止めをかける<地球村>の新しいルール作りに取り組む。生徒の一人は「視点を変えることで見えなかったものが見えるようになり、楽しかった」と自己評価表に書き込んだ。

少なくとも小学校高学年と中3または高1、2年の年代との二度、世界全体を1つのユニットとして体験できるグローバル教育を提供することにより、断片の積み重ねである今の学校教育に横串をとおしたい、というのが私の念願である。心の器が大きい人間を小さいときから育てないと、グローバルについていくら語っても世界は今までと変わらない。グローバルの反対がローカルなら両方の同時導入によってダイナミズムを生むことができる。グローバルの反対が視野狭窄であれば、日本にとって大きな問題である。

プロフィール：渥美育子

一般社団法人「グローバル教育研究所」理事長

(株)グローバル教育(合併)社長

(株)マルチカルチュラル・プレーイングフィールド 社長



- 1970以降 青山学院大学専任講師・助教授
- 1980-82: ハーバード大学研究員として文化の伝播について研究
- 1983: ボストン郊外で異文化マネジメント研修会社を起業
- 1985: “タイム”誌で取り上げられ、異文化研修ブームに
- 1995以降: 世界トップレベルの多国籍企業(DuPont, IBM, UTCなど)対象に世界市場戦略や、グローバル人材育成のオリジナル研修を実施。30ヶ国出身の講師とともにツールの制作などを含め、グローバル教育の理論の構築と実践に専念
- 2001: シンガポールにオフィスを持ち、ASEANを拠点に加えてグローバル教育をおこなう
- 2004: 米国中核テロをきっかけに子どもの世界共通教育にも参入
- 2007後半以降: 帰国。学校から大企業までを対象に統一理論を使ったグローバル教育をおこなう

来年3月に「(地球村)プログラム」実施

さて、このプログラムを希望者を募って実施することにしました。初めての試みでもあり、今回はグローバル教育研究所の方に講師をお願いしました。春休み期間に合宿での短期集中で実施します。

実施日 3月21日(土)~23日(月)

場所 大原学園「富士宮研修所」

対象 中学1年生~高校2年生 グローバル同好会の生徒

定員 約30名(定員オーバーの場合は抽選とします)

費用 45,000円を予定

引率 グローバル教育研究所指導員

本校教員

参加申し込みの詳細については、次号(期末考査前には発刊します)でお知らせします。

海外に行くなら、「たびレジ」に登録を

外務省は海外旅行者向けに様々な冊子を作って配布したり、ホームページから情報を発信しています。



「海外安全 虎の巻」

安全な海外旅行をするための基礎知識から、「悪徳タクシー」に乗り合わせたらどうするか、などといった様々なトラブルの対処法を具体的に示しています。外務省のホームページからPDFでダウンロードすることができます。

この他にも数種類の冊子が配布されています。

なお、7月1日から新たな渡航情報発信システムがスタートしました。それが「たびレジ」です。海外旅行前に、渡航する国や

地域、自分の携帯電話・スマートフォンなどを登録しておく、安全情報は勿論のこと、緊急事態(例えば、テロや地震など)が発生した場合、どのように対処したらよいかというような情報が登録した端末に自動的に入ってくる、というものです。是非登録することをお勧めします。本校の海外研修に参加する生徒諸君には、登録を義務化する予定です。何事も「転ばぬ先の杖」。



次号では、「全日本模擬国連」の出場報告を特集します。